

b) 歴史と発展

1. 資産形成の歴史的背景

(1) 8～9世紀

8世紀から9世紀にかけての時代は、中国の唐の政治制度である律令制とその文化を模範として、中央集権国家が確立した時代である。この頃、日本の北方領域であった陸奥国とそのさらに北側(北奥)の地域は、「蝦夷」と呼ばれる人々が住み、中央政府の直接支配の及ばない辺境の地とされていた。しかし、奈良から京都に都が遷される頃から蝦夷征討が開始され、802年に拠点となる胆沢城¹が造営されたことにより、衣川以北における中央政府の版図は拡大した。こうして、辺境の地においても、胆沢城の造営を契機として北上川の流域を中心に寺院が造営され、仏教が普及していった。

(2) 10～11世紀後半

10世紀から11世紀後半は、律令国家体制から王朝国家体制への転換期に当たる。11世紀の奥州地方では、安倍氏・清原氏の2大豪族が台頭し、衣川以北の地に勢力を拡大した。

しかし、1051～1062年に起こった前九年合戦では奥六郡を基盤とする安倍氏が、1083～1087年に起こった後三年合戦では奥六郡の西に当たる山北三郡を基盤としていた清原氏が、それぞれ中央政権から陸奥守²として派遣された源氏によって滅ぼされた。

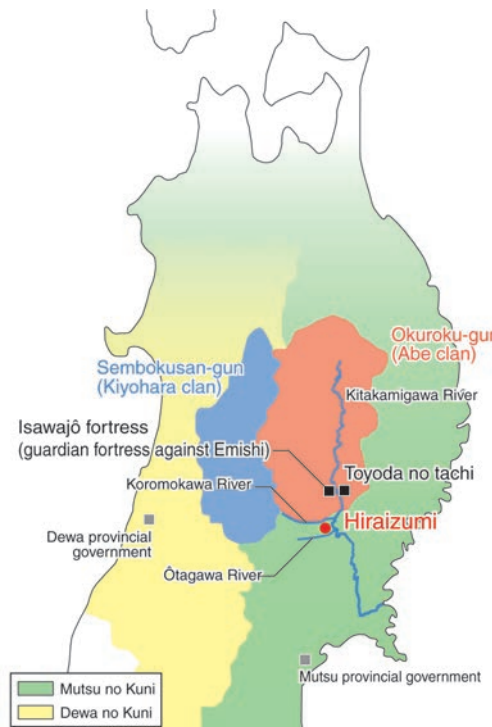


図 2-36
10～11世紀における安倍氏と清原氏の勢力範囲図

1 胆沢城：802年に「蝦夷」の反乱を鎮圧した坂上田村麻呂が造営した拠点。図2-36を参照のこと。

2 陸奥守：陸奥国の行政・司法等の国務の全体を統括する長官の職。



その後、安倍氏と清原氏の系譜を継ぐ藤原清衡が、陸奥国¹及び出羽国²の押領使³として奥六郡及び山北三郡を手中に治めた。これを出発点として、それ以後の歴代の奥州藤原氏が鎮守府将軍⁴・陸奥守に就任することとなり、平安京の中央政権と一定の距離を保ちつつ、奥州における政治・行政上の拠点が形成されることとなった。

(3) 11世紀末期～12世紀

11世紀末期から12世紀にかけての時期は、釈迦の入滅後、一定の時間が経過して仏法が衰えるとされた「末法思想」の隆盛期に当たる。末法の世の初年であるとされた1052年には、天皇との外戚関係の下に最高権力を誇った関白藤原頼通が、平安京の南方に当たる宇治の地に、阿弥陀如来の極楽浄土の姿を表現することを目的として平等院阿弥陀堂とその園池の造営を開始し、翌年に落慶法要が行われた。

[本推薦書 136-137 ページを参照]

一方、11世紀後半の陸奥国では、戦乱が繰り返されていた。そのような戦乱を生き抜いた経験が、藤原清衡をして法華経などの仏教的理念に基づく国づくりに邁進させ、結果的に藤原氏四代は現世の仏国土(浄土)の実現を目指して独特の政治・行政上の拠点を生み出した。

[清衡の時代: ~1128]



写真 2-101
藤原清衡画像
© 川嶋印刷株式会社

11世紀末期～12世紀初頭にかけての時期に、清衡(後の奥州藤原氏初代)は豊田館を後にし、奥六郡の南の境界線である衣川を越えて南方の平泉へと館を移した。平泉は、東稲山をはじめ東方に展開する北上山地と、西方に展開する奥羽山脈との間に挟まれた狭隘な盆地に当たり、日本の北方領域における主要道が北上川と近接して南北に貫く交通の要衝を成していた。東を北上川、北を衣川、南を太田川に挟まれた河岸段丘には、猫間が淵と鈴沢の池から成る細長い2本の低湿地が入り組み、随所に湧水が点在する独特の水辺の地形を形成していた。

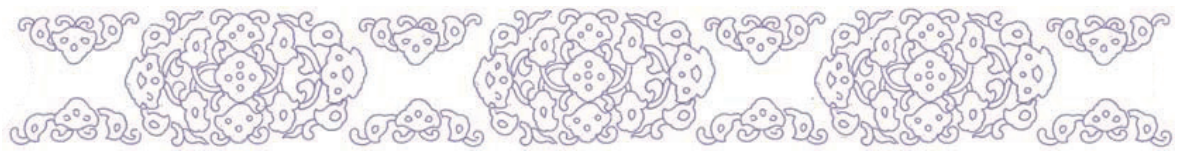
豊田館から平泉へと移った清衡は、衣川の渡河点として要衝の地を成

1 陸奥国; 11～12世紀の奥州地方に存在した国のひとつで、行政単位である奥六郡を含む。図2-36を参照のこと。

2 出羽国; 11～12世紀の奥州地方に存在した国のひとつで、行政単位である山北三郡を含む。図2-36を参照のこと。

3 押領使; 中央政権に対する反体制武装勢力の追捕のために、諸国に設置された職又は機関。

4 鎮守府将軍; 蝦夷を鎮めるために奥州地方に設置された役所の長官の職。



した関山に中尊寺を造営した。古文書によると、1105年に多宝寺を建立したことが知られ、各建造物に残る棟木銘又は棟札によると、1122年に中尊寺経蔵、1124年に中尊寺金色堂をそれぞれ建立したことが判明している。また、中尊寺の伝承によると、1107年に大長寿院(二階大堂)を建立したとされている。清衡は、1126年に現在の大池伽藍跡に比定されている「鎮護国家大伽藍一区」の伽藍主要部の落慶供養を行ったが(『供養願文』)、2年後の1128年に死去し、その遺体は中尊寺金色堂に安置された。

中尊寺の造営には、政治・文化の側面のみならず地理的な側面においても、平泉が奥州の中心であることを決定づける意義があった。それ以後、基衡・秀衡・泰衡を含め、奥州藤原氏は、約100年間にわたり奥州の産金をもとに蓄積した莫大な富を背景として、日本の北方世界における政治・行政上の拠点としての平泉を発展的に形成していった。

〔基衡の時代: ~1157年頃〕

二代基衡は、毛越寺を造営した。丘陵上に位置する中尊寺とは異なり、円隆寺とその前面の庭園などから成る毛越寺は平地に造営された伽藍であった。背後に控える塔山との緊密な関係の下に、仏堂・庭園が一体となって、主に薬師如来の仏国土(浄土)が表現された。基衡は1157年頃に死去し、その遺体は中尊寺金色堂に安置された。

基衡の妻は、毛越寺の東隣に観自在王院を建立した。発掘調査により、「舞鶴が池」と呼ぶ庭園の園池跡と、その北岸部において大阿弥陀堂・小阿弥陀堂の地下遺構が発見された。

発掘調査の成果によると、基衡の時期には、毛越寺から観自在王院を中心とする区域を対象として、政治・行政上の拠点としての計画的な整備が行われたことが明らかとなっている。観自在王院に南面して東西大路などの幹線道路が整備されるとともに、その付近には牛車を格納する車宿や倉庫である高屋群などが設けられていたことも判明した。



写真 2-102
藤原基衡画像
©川嶋印刷株式会社

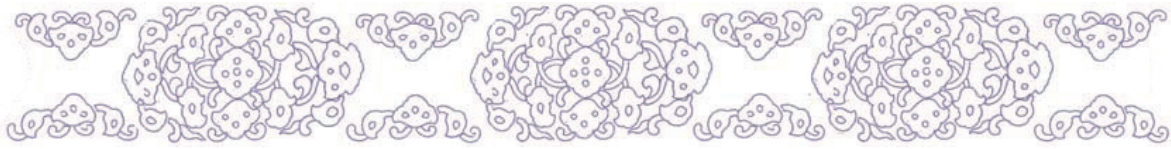


写真 2-103
藤原秀衡画像
©川嶋印刷株式会社

〔秀衡の時代: ~1187〕

三代秀衡の時期には、北上川に近い平泉の東域に当たる区域に、政治・行政上の拠点の中核的施設として、居住・政務の場である「平泉館」(居館)が存在した。その遺跡は、北上川沿いに柳之御所遺跡として遺存する。その西に接して、阿弥陀如来の極楽浄土を表現した寺院である無量光院が造営された。こうして、政治・宗教・生活が一体化した空間が形成された。

「平泉館」(柳之御所遺跡)は、奥州藤原氏の先祖に対する強烈な崇拜精神に基づき、清衡・基衡の遺体(ミイラ)を納めた中尊寺金色堂の正面方向に位置していた。柳之御所遺跡の最盛期に当たる12世紀後半には、柳之御所遺跡が北上川に面する部分に湊が開かれ、舟運による物資の運搬が行われていたことが想定されている。

「平泉館」の西に建立された無量光院は、さらにその西方に位置する金鶏山を背景として、阿弥陀如来の極楽浄土の姿を表現するために造営された。それは、宇治平等院の伽藍配置と空間構成を発展・継承したものであった。

このように、政治・行政上の拠点の中核的施設として、居住・政務の場であった居館、阿弥陀如来の極楽浄土を表現した寺院が東西に並んで位置し、浄土思想の中でも特に阿弥陀如来の極楽浄土信仰に基づく空間構成が採用された。

1170年に鎮守府将軍に任じられ、1181年には陸奥守を拝命して全盛を極めた三代秀衡は、1187年に死去し、その遺体は中尊寺金色堂に安置された。

〔藤原氏の滅亡: 1189〕

鎌倉幕府を開いた源頼朝の弟である源義経¹は兄の追討を逃れ、1187年に平泉の藤原秀衡の下に身を寄せた。しかし、1189年、頼朝の力を恐れた四代泰衡に襲われ、自害した。その後、鎌倉の源頼朝は奥州に攻め入って奥州藤原氏を滅ぼし、平泉館は火災により被災した。この文治五年奥州合戦(1189年)を以て、平泉は日本の北方領域におけ

[本推薦書付属資料 4.7.a. 86-87 ページを参照]

1 源義経: 1159-1189。平泉を滅ぼし、鎌倉幕府を開幕した源頼朝の弟。父親が戦乱で敗死したため、京都の鞍馬寺に預けられ、後に藤原秀衡を頼り保護された。兄頼朝との関係が悪化したのに伴い、再び奥州に逃れたが、1189年の平泉滅亡とともに敗死した。武運に長じるも、悲劇の武将として数々の伝承を生み、後代の文学・演劇の題材とされた。



る政治・行政上の拠点としての機能を終えた。往時の平泉の様相を今日に伝える貴重な文献史料「寺塔已下注文」(『吾妻鏡』に収載。)は、源頼朝が平泉を攻略した直後に中尊寺・毛越寺の僧によって注進されたものである。

(4) 13世紀～14世紀前半

1192～1334年までの時代は、武士が政権を掌握し、鎌倉に幕府(武士による本格的な政権)が置かれた時代である。奥州藤原氏が滅亡したことにより、平泉の寺院は鎌倉幕府の保護・統制を受けることとなった。

1226年には、毛越寺(円隆寺)が焼失した。また、1337年には中尊寺の諸堂が焼失したが、金色堂と経蔵の一部は災禍を免れた。このように、12世紀に隆盛を誇った平泉の寺院も次第にその姿を変えたが、残された建築物については覆堂を建造するなど手厚く保護された。

奥州藤原氏が滅亡した年の100年後に当たる1288年には、鎌倉幕府が中尊寺金色堂の覆堂を建造した。現存する覆堂は、その後、15世紀頃に本格的な覆堂として再建されたものである。

さらに、1304年には、中尊寺経蔵の修理が行われた。

(5) 14世紀後半～16世紀

14世紀～16世紀にかけての時代は、南北朝¹の内乱期を経て、京都に室町幕府が開かれた時代である。この時期における平泉の諸寺では、この地域の有力な封建領主による庇護を頼みとする一方、多くの参拝者が霊場としての平泉を訪れたことにより、寺院の維持が図られていた。今日に伝えられる巡礼札や「平泉諸寺参詣曼荼羅」などは、中尊寺・毛越寺を中心とする平泉の諸寺が参詣の霊場であったことを示している。

1573年には、この地域の封建領主の間で争乱が起き、毛越寺南大門及び観自在王院の堂宇が焼失した。

また、平泉に深く関わった人物である源義経は、15世紀頃に書かれた文学作品である『義経記』をはじめ、多くの文芸・芸能・芸術、伝承などの題材として取り上げられた。

1 南北朝：14世紀前半から末期にかけて、後醍醐天皇の系譜の南朝と室町幕府が擁立した天皇から成る北朝との対立が継続した時代。



(6) 17世紀～19世紀前半

1603年に江戸幕府が開かれ、諸大名は藩ごとに領内の支配を行うようになった。平泉は仙台藩の庇護下に入り、1618年に仙台藩主伊達政宗が平泉を巡検して諸寺の寺領を安堵した。1689年に、仙台藩は遺跡保存のために寺院の仏堂の礎石や庭園の庭石を持ち出すことを禁止し、遺跡の周囲に杉並木を植栽した。中尊寺の参道である月見坂が整備されたのもこの頃であった。

17世紀前半から19世紀の半ばにかけては、多くの文人墨客が平泉を訪れた。

1689年には俳人松尾芭蕉が平泉を訪れ、その盛衰を「三代の栄耀一睡の中にして、…」と感慨を記した。また、彼の俳句集『おくのほそ道』に収載する「夏草や兵どもが夢の跡」、「五月雨の降りのこしてや光堂(中尊寺金色堂)」などの俳句には、多くの建築物が失われ廃墟と化した遺跡の状況をはじめ、唯一の建築物としてかつての平泉を彷彿とさせる金色堂など、現在にも連なる平泉の様相が描写されている。

1786年には、旅行家の菅江真澄が東北地方の各地を巡遊する途上で平泉を訪れており、「かすむ駒形」(『真澄遊覧記』)と題する紀行文を記した。

このような後代の文人墨客による文化的活動も、平泉の旧跡を今日に伝える上で大きな役割を果たした。

[本推薦書付属資料 3.a. 2-3 ページを参照]

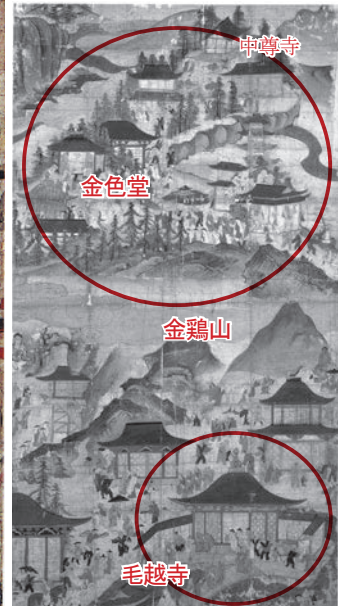


写真 2-104
平泉参詣曼荼羅 (16世紀)
© 川嶋印刷株式会社



(7) 19世紀後半以降

1868年の明治維新により、日本は近代国家への道を歩みはじめた。1869年には幕藩権力が天皇に返還され、平泉に対する伊達氏の支配はなくなった。さらに、1876年には明治天皇の各地巡幸の際に平泉の巡覧があり、これを契機として岩手県は1877年に「宝物保存規則書」を作成し、中尊寺・毛越寺の保存事業に着手した。

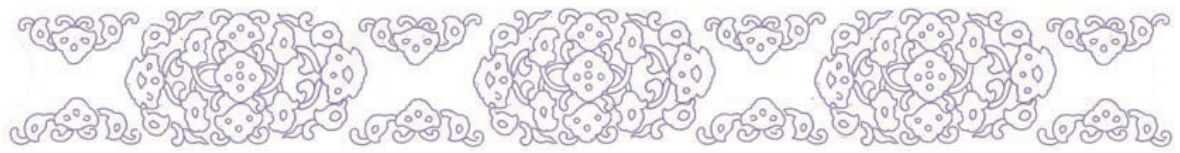
一方、1897年には「古社寺保存法」が制定され、1929年に「国宝保存法」に改められた後は、社寺の建造物や宝物のみならず、国・地方公共団体・個人の所有する文化財へと保護の対象が拡大された。さらに1919年には「史蹟名勝天然記念物保存法」が制定され、社寺境内の名所旧跡のみならず、その他の史蹟・名勝・天然記念物についても広く保護の対象とすることとされた。中尊寺金色堂・毛越寺・無量光院跡については、それらの歴史的・文化的な重要性に鑑み、史蹟名勝天然記念物保存法の制定当初から国家的な保護の対象とされた。

一方、長い伝統をもつ宗教的な儀式・祭礼は、多くの人々の信仰心や努力によって受け継がれ、¹ 廃仏毀釈¹ などにより存続が危ぶまれた一時期を乗り越えて、今日まで確実に伝えられてきた。

1945年の第二次世界大戦敗戦以後は、日本が民主主義的国家として発展した時代である。1950年には、「国宝保存法」及び「史蹟名勝天然記念物保存法」を統合して、新たに「文化財保護法」が制定された。それ以来、構成資産はすべて国の文化財として指定され、今日まで保護されてきた。

このような法的な保護措置に加え、資産を構成する寺院では活発な宗教活動や伝統的な祭礼なども盛大に行われており、平泉は今日なお多くの参拝者や観光客を惹きつけている。

1 廃仏毀釈：1868年の明治維新により、政府の神仏分離・神道国教化政策に伴って起こった仏教の抑圧・排斥運動。



2. 資産の形態・性質から見た歴史

推薦資産の独特の形態・性質は、以下に示すとおり、2つの側面に基づく歴史的な過程を経て形成された。

(1) 政治・行政上の拠点としての歴史

ア. 都城の造営—城壁・牆壁を持たない政治・行政上の拠点の系譜—

6世紀に中国・朝鮮半島から仏教が伝来するのに伴い、造寺・造仏に関する高度な技術のみならず、律令に基づく政治・行政上の機構や制度などがもたらされた。それらの中心となる政治・行政上の拠点を造営するに当たっては、中国と同様の方格地割に基づく条坊制を規範としつつも、日本に独特の気象・植生などの自然環境や造営対象地の地形をも十分に考慮して、全体を囲繞する城壁や各条坊を区画するための牆壁が存在しない日本に独特の都城造営の手法が採用された。

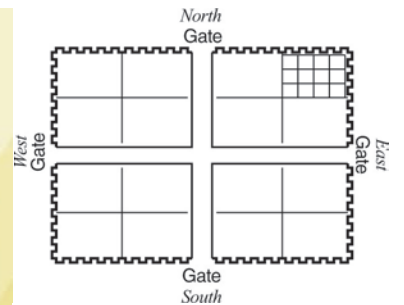
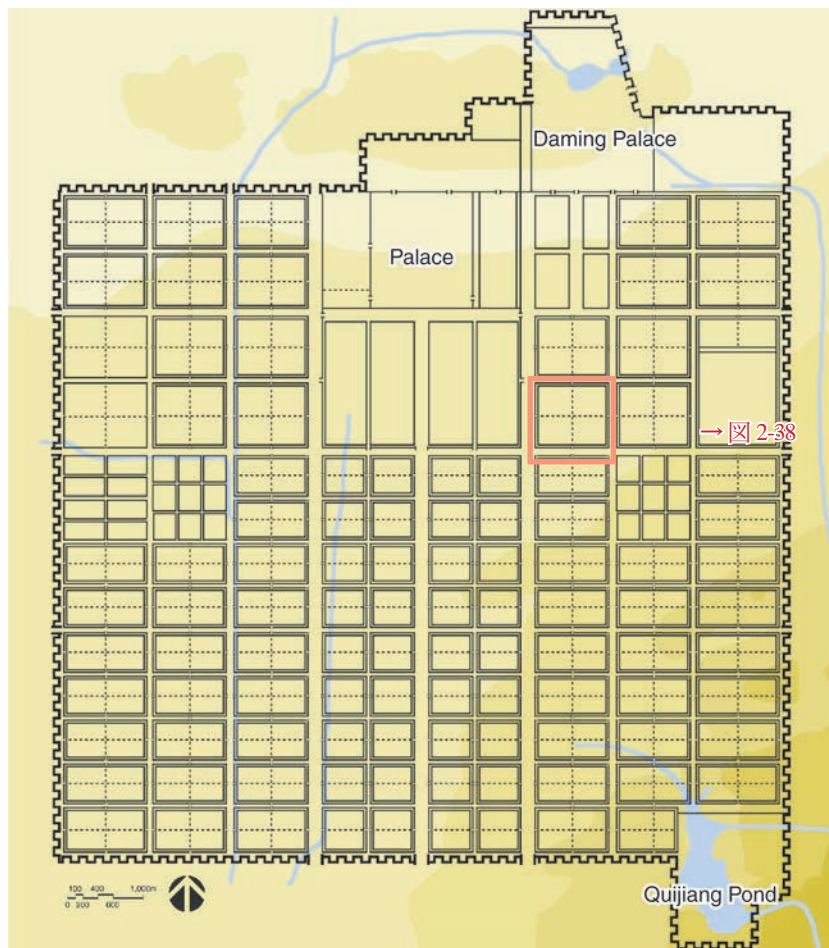


図 2-38
牆壁内部(細部)

図 2-37
中国の首都長安の城壁と方格地割(唐代)



日本における統一国家の誕生の起源となった6～7世紀の飛鳥地方¹においては、天皇の宮殿、寺院及び関連施設群が山や丘陵に囲まれた盆地の随所に配置され、周囲を取り巻く山・丘陵・河川なども渾然一体を成す政治・行政上の拠点が形成された。



写真 2-105
飛鳥及びその考古学的遺跡
© 岩手県教育委員会



写真 2-106
飛鳥遠景
© 明日香村教育委員会



図 2-39
古代飛鳥地方の地形及び宮都・寺院の位置図

7世紀末期に日本で最初の都城として造営された藤原京(694-709)は、整然とした方格地割に基づいて計画・設計されたが、盆地内に自然の独立丘として点在する大和三山(畝傍山・耳成山・香具山)の位置をも十分考慮し、外周に城壁を伴わない日本に固有の形態・構造を持っていた。

さらに発展した形態構造を持つ8世紀の平城京(710-784)においても、南端に位置する羅城門の両脇に短い羅城を形式的に備えるのみで、都城全体の外周には城壁を完備していなかった。

1 飛鳥地方； 奈良盆地の南端に当たり、6世紀末期から7世紀末期までの間に多くの天皇の宮都が造営された地域。

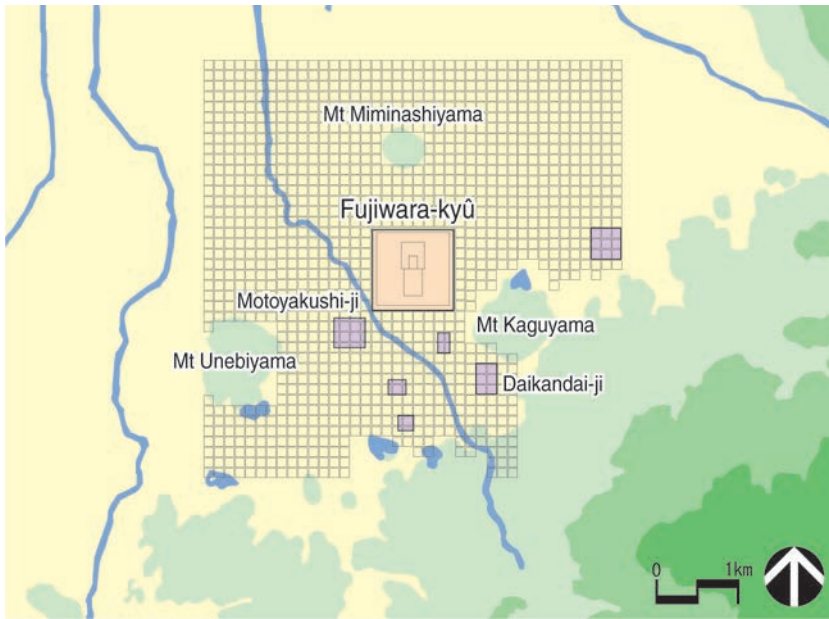
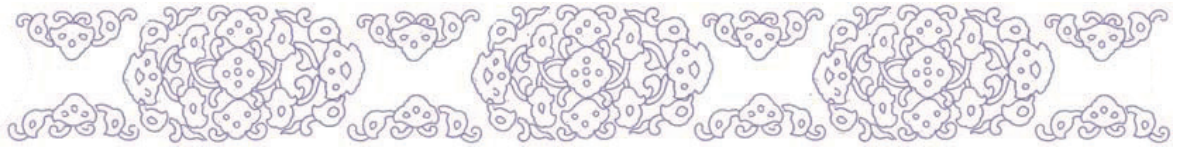


図 2-40
藤原京の地形及び宮都・寺院の位置図

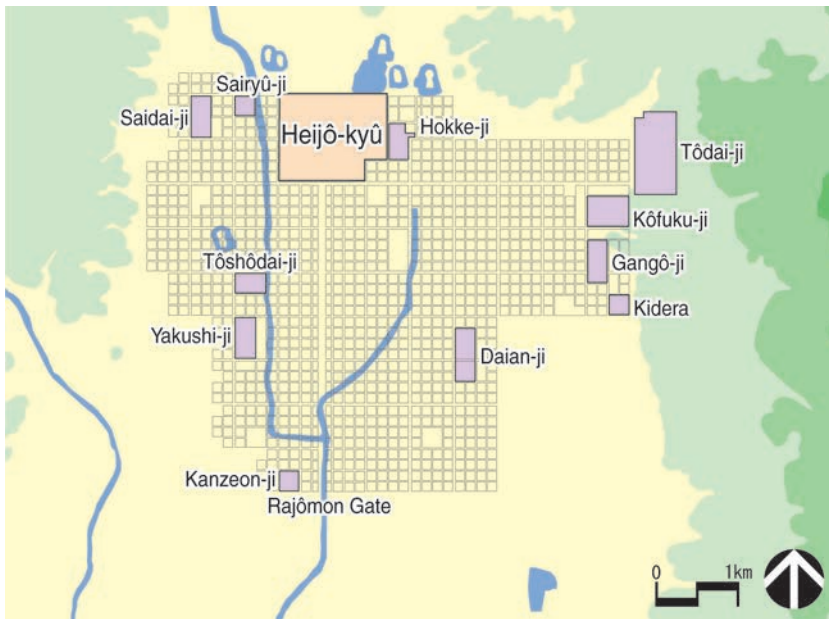


図 2-41
平城京の地形及び宮都・寺院の位置図

さらに発展した形態構造を持つ8世紀の平城京(710—784)においても、南端に位置する羅城門の両脇に短い羅城を形式的に備えるのみで、都城全体の外周には城壁を完備していなかった。

このように、6～8世紀に、仏教をはじめ外来の宗教・思想とともに日本にもたらされた政治・行政上の機構・制度は、気象・植生・地形などの日本に固有の自然の立地条件とも調和しつつ、中国・朝鮮半島とは異なる形態・性質の都城—政治・行政上の拠点—を生み出した。



イ. 都城の拡大

8世紀末期に造営が開始された平安京(794ー)も、外周を囲む城壁及び条坊を区画する牆壁を持たないという点において、基本的に前世紀の平城京と同様の形態・構造を持っていた。しかし、次第に律令制が変質するのに伴って、都城の構造は大きく変容を遂げた。

末法の世が近づくのに従い、浄土思想の中でも特に阿弥陀如来の極楽浄土信仰が興隆すると、平安京内において仏堂の建立が禁じられていたことも影響して、平安京郊外の別荘又は御所に付属して伽藍の造営が進んだ。

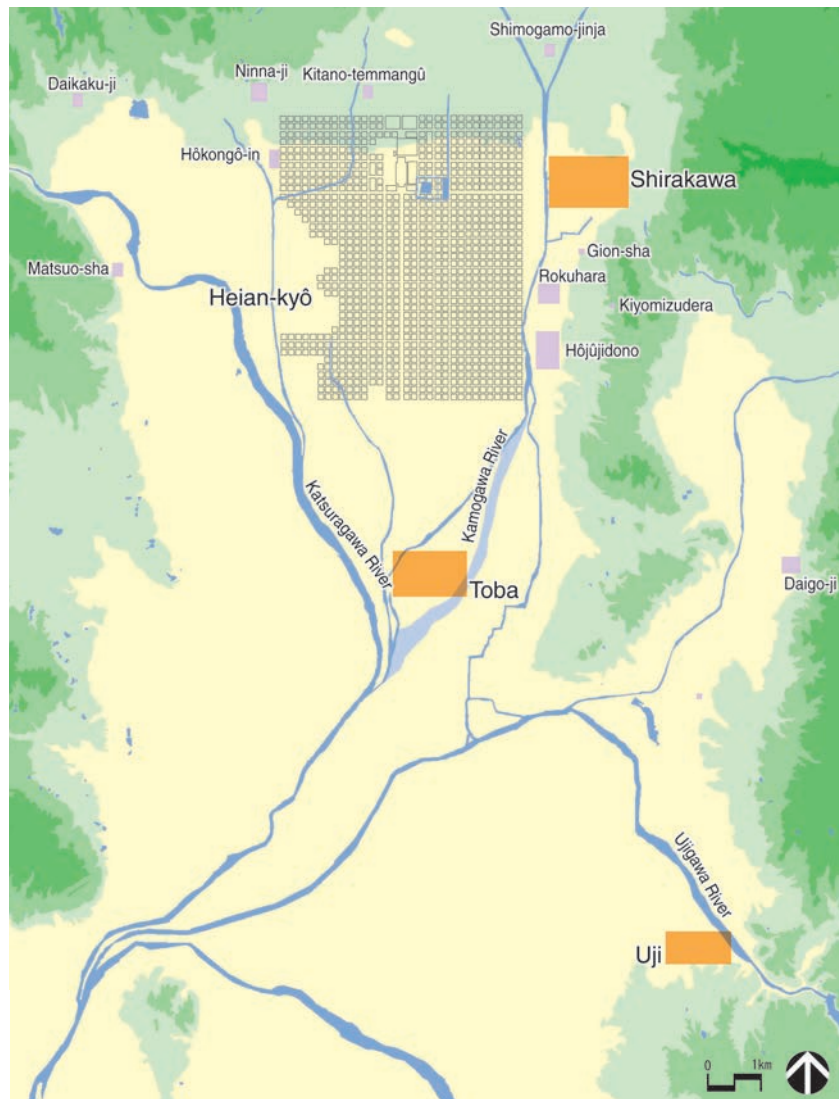
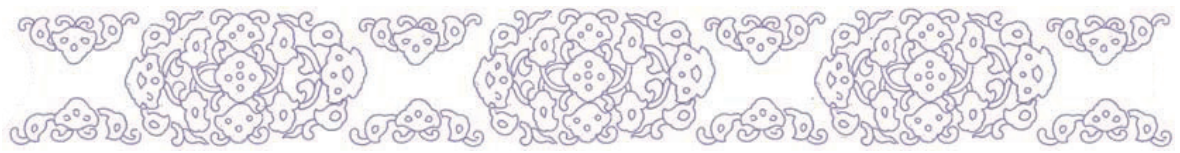


図 2-42
平安京の地形と宇治・白河・鳥羽との関係図

まず、上流貴族である藤原頼通(992ー1074)が宇治に造営した別荘を後に阿弥陀如来の極楽浄土信仰に基づく寺院へと改めた。これに後続して、白河上皇(1053ー1129)をはじめとする皇室も、風光明媚な地形と豊かな水の環境を備えた白河や鳥羽の地に、住宅及び政治・行政



の施設である「御所」のみならず、国家の鎮護や自らの極楽往生などを願って、仏国土(浄土)を象った多くの「仏堂」・「庭園」を含む伽藍を造営した。このような平安京の郊外に形成された「御所」・「仏堂」・「庭園」から成る一群の施設は、豊かな自然環境から成る平安京域外において、上皇が政務を実行するための新たな政治・行政上の拠点の形態として確立した。

ウ. 平泉の造営

10～11世紀の中央政府の弱体化とともに伸長した地方の勢力の中でも、12世紀日本の本州北部の政治的境界領域において成長を遂げた奥州藤原氏は、政治・行政上の拠点である平泉を生み出した。平泉には、平安京域外の白河や鳥羽において確立した新たな政治・行政上の拠点の形態が導入された。それは、6～7世紀以来の日本の古代都城と同様に外周を囲む城壁を持たず、東を東稲山及び北上川、西をなだらかに連続する丘陵、北を衣川、南を太田川に臨む風光明媚で水の豊かな自然の地形・環境とも融合しつつ、仏教に基づく理想世界の実現を目指して造営された。

現時点において、白河や鳥羽における政治・行政上の拠点としての資産は地上に全くその痕跡をとどめず、記録などによってのみかつての姿をうかがい、知ることができるものであるのに対し、平泉には、地上に現存するもののみならず、地下に遺存するものも含め、政治・行政上の拠点の中核を成す居館(柳之御所遺跡)及び寺院(中尊寺・毛越寺)、仏堂・庭園(中尊寺金色堂・毛越寺庭園・中尊寺大池伽藍跡・観自在王院跡・無量光院跡)の一群の構成資産が良好な状態の下に残された。

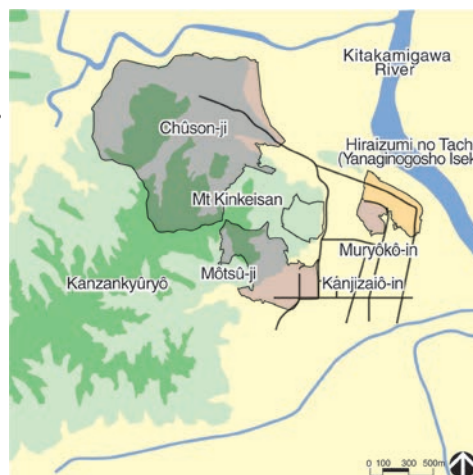


図 2-43
平泉の地形及び居館・寺院の位置図



(2) 仏国土(浄土)を表現する一群の建築・庭園の歴史

平泉が造営される過程で重要な意義を持ったのは、日本古来の自然崇拜思想とも融合しつつ、法華経、密教、浄土教など多様な要素を包括・統合し、独特の性質を持つものへと展開を遂げた日本の仏教であり、その中でも特に末法の世が近づくとともに興隆した阿弥陀如来の極楽浄土信仰を中心とする日本の浄土思想である。それは、以下のような歴史的過程を経て、仏国土(浄土)を空間的に表現した平泉の建築・庭園群などの意匠・形態へと直接的に反映した。

ア. 仏教及び浄土思想の日本的発展・進化

a. インドに発生した大乘仏教と浄土思想

紀元前後のインドにおいては、興隆してきたヒンドゥー教に触発されて、在家信者の救済を重視する民衆宗教として的大乗仏教の運動が展開した。

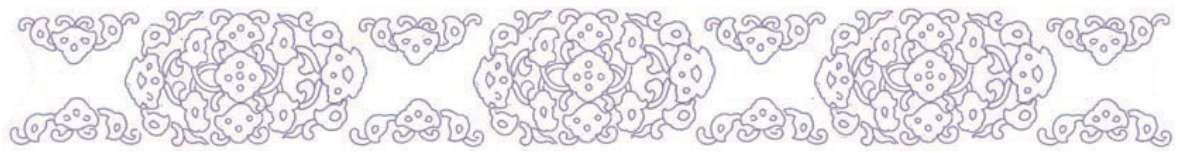
大乘仏教においては、「仏」はゴータマ・シッダルタ唯一人を指すのではなく、過去・現在・未来の三世にわたり、全ての方角に存在するものとされた(三世十方の諸仏)。さらに、十方世界に存在する釈尊以外の諸仏は、仏道の間として自らが出現すべき固有の国土を清浄化し、弥勒菩薩の兜率天浄土を含め、阿弥陀如来の西方極楽浄土、阿閼仏の東方妙喜世界、薬師如来の東方浄瑠璃浄土、観世音菩薩の補陀落山浄土など、多様な「浄土」を居所とすることが想定された。このような大乘仏教の興隆に伴い、諸仏が衆生救済に努める各々の「浄土」に往生したいという思想が形成された。

b. 中国・朝鮮半島における浄土思想

サンスクリット語による大乘経典の原典には「浄土」に当たる用語は存在しなかったが、中国において「無量寿経」や「阿弥陀経」の漢訳に際して、原典の「仏国土を清浄化する」という考え方が「浄土」と表現されるようになった。

ガンダーラをはじめアジアの西域の地方においては、釈迦の後継者とされた弥勒菩薩の兜率天浄土への信仰が始まり、中国にも伝播普及した。まもなく、阿弥陀如来に対する信仰も高まりを見せ、その居所である「極楽」と「浄土」とが結び付くことにより、「極楽浄土」という成語が誕生した。

さらに、中央アジアで編纂された「観無量寿経」が中国に伝わり、道綽



(560-645)や善導(613-681)がその理論書及び注釈書を作成する過程で「浄土」を観想する行業が奨励されるようになった。こうして、仏陀の入滅後、一定の時間が経過すると仏法が衰えたとする末法の時代から救済されるための方法として、阿弥陀如来の極楽浄土への往生を願う阿弥陀浄土信仰が進んだ。

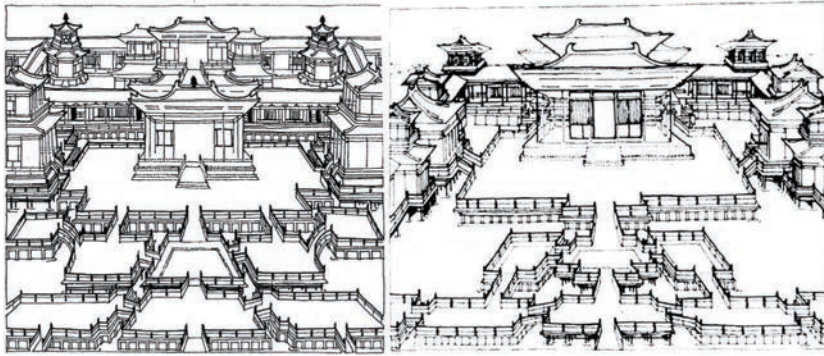


図 2-44
敦煌莫高窟に描かれた阿弥陀堂と宝池の骨格図

中国において進化した浄土思想は、4世紀後半～5世紀頃に仏教全般とともに朝鮮半島にもたらされた。高句麗・百済・新羅の3国は積極的に仏教を受容し、7世紀に新羅が、10世紀から14世紀にかけて高麗が、それぞれ半島を統一すると、浄土思想を含め、仏教はさらなる進展を遂げた。しかし、その後の朝鮮王朝は儒教の朱子学を国教とし、廃仏運動を行ったため、朝鮮半島の仏教は勢いを失っていった。

c. 日本で進化した浄土思想

6世紀に中国・朝鮮半島から日本に伝来した仏教は、同時に伝来した道教・神仙思想・陰陽五行説などとともに、自然崇拜を主軸とする日本古来の神祇信仰とも融合していった。特に日本古来の自然崇拜思想においては、自然の山・川・巨岩・湧泉・巨木などが神(精霊)の「依代」であるとされ、死後に霊が向かう「天」に最も近い山中は他界(死後世界)であると見なされた。外来の宗教である仏教は、このような日本固有の自然観とも融合し、独特の日本的な仏教へと展開を遂げた。

仏教の一思想として伝来した浄土思想に基づき、7～8世紀に浄土経典の注釈書や浄土の光景を図像化した曼荼羅(當麻曼荼羅)などが作成された。この時期の日本の浄土思想のうち、特に阿弥陀浄土信仰は死者追福とその極楽浄土往生を祈願するものであり、末法の到来期における自己救済的な性質を持つものではなかった。

9世紀には、比叡山延暦寺の僧であった円仁(794-864)が中国五台



山から阿弥陀如来の唱名・念仏を伝え、常行三昧の行法が重視されるようになった。常行三昧は、阿弥陀如来像を安置した方3間又は方5間の常行堂と呼ぶ小規模な仏堂内において、阿弥陀如来の名号を唱えながら四周を行道し、その相好を内面的に観想する行法であり、各地に常行堂建築が普及した。



写真 2-107
當麻曼荼羅(日本 奈良県)
© 当麻寺

さらに、10世紀末期には、源信(942-1017)が『往生要集』において地獄の惨状と極楽浄土の荘厳とを詳細に対比して描写し、極楽浄土へ往生するためには、観想念仏と臨終行儀が重要であることを説いた。浄土の内面的観想を助けるために、死後に往生すべき浄土の光景や臨終時の来迎の光景を描いた多数の図像が作成され、浄土を視覚的に観想することが自己の極楽浄土への往生を実現する上で最重視されるようになった。それらの図像には、阿弥陀如来の極楽浄土が日常生活の場に近接する山や丘陵の西方彼方に想定されることや、極楽浄土の「宝池」に繋がる大海・河川等が彼我世界の結界であることなどが示された。

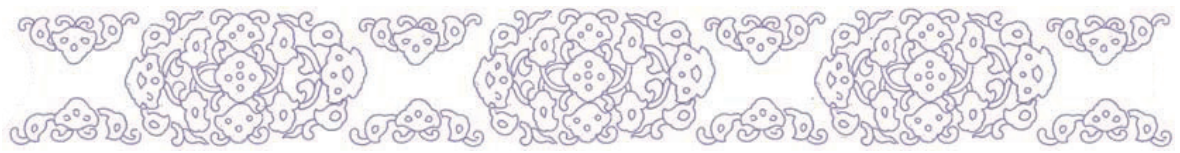


写真 2-108
延暦寺常行堂(日本 京都府)
©小原祐子



写真 2-109
富貴寺大堂(日本 大分県)
撮影 菅常久

極楽浄土への往生信仰が深まる一方で、法華経や密教の隆盛に伴い、大日如来や薬師如来への信仰の下に現世における救済を求める考え方も深まっていった。12世紀の日本では、現世がそのまま究極の悟りの世界であると捉えられ、必ずしも来世の浄土に往生するのではなく、現世に仏の悟りの世界である仏国土(浄土)を実現できるという思想が展開した。



写真 2-110
山越阿弥陀図(禅林寺蔵、日本 京都府)
© 禅林寺

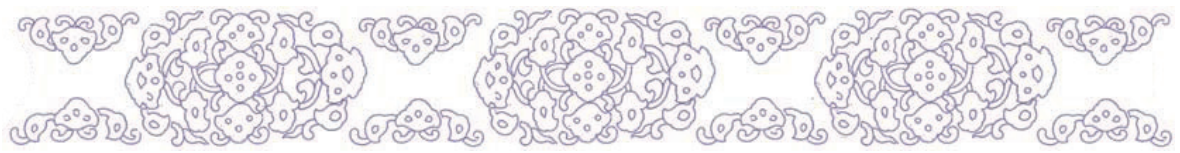


写真 2-111
阿弥陀二十五菩薩来迎図(知恩院蔵、日本 京都府)



写真 2-112
地獄極楽図(金戒光明寺蔵、日本 京都府)
© 金戒光明寺



イ. 仏国土(浄土)を表現した芸術作品としての顕著な仏堂の形式

a. 鎮護国家を目的とする寺院の伽藍配置の類型とその発展

中国から朝鮮半島を通じて仏教が日本へと伝来するのに伴って、鎮護国家を目的とする造寺の理念、意匠・技術がもたらされ、釈尊の舎利を納めた塔及び本尊となる仏像を安置した金堂を回廊が取り囲む様々な寺院伽藍の様式が発展した。

6世紀末期に有力豪族の蘇我氏が飛鳥地方に造営した飛鳥寺(法興寺)では、塔を中心として、その北・東・西の三方に各々塔に面して金堂が建ち、その外側を南面にのみ門が開く回廊が巡る求心的な平面形の伽藍配置が誕生した。これと同様又は類似の配置形式を持つ寺院には、6世紀の新羅の皇龍寺跡(韓国・慶州)や高句麗の清岩里廢寺跡(北朝鮮)などがあり、朝鮮半島からもたらされた意匠・技術の影響は明白である。

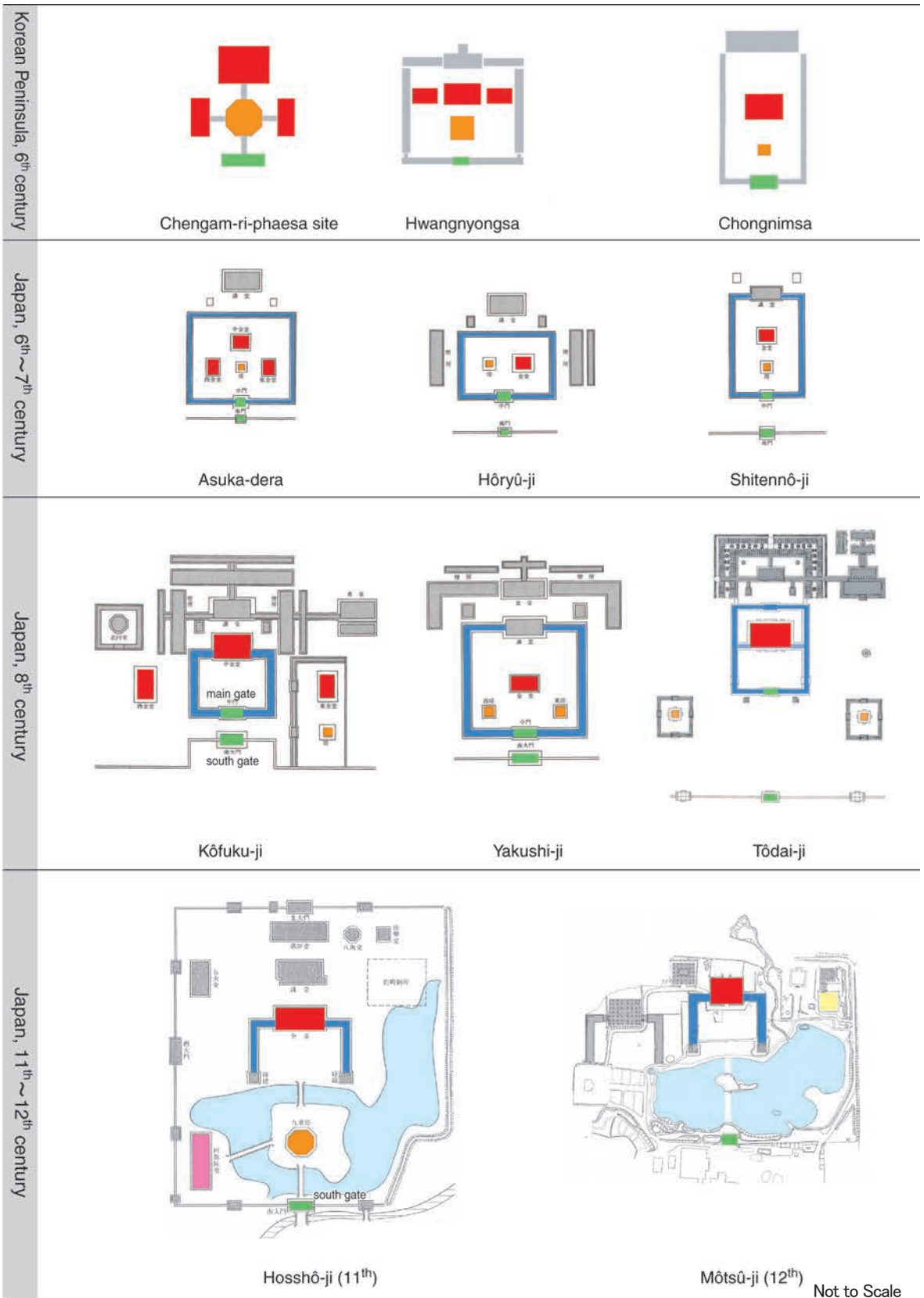
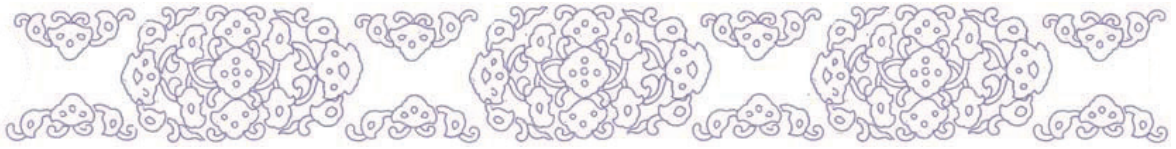
飛鳥寺の伽藍配置に加えて、6世紀末期に聖徳太子が造営した四天王寺(大阪)や7世紀後半の再建とされる法隆寺(1993年に世界遺産一覧表に記載)などにおいて、朝鮮半島の寺院の影響を受けた別の伽藍配置も生まれた¹。

さらに8世紀の平城京(奈良)においては、回廊が正方形に巡る敷地の中心に金堂、西南及び東南の隅部に2塔が建つ薬師寺の伽藍配置をはじめ、金堂の東西両側から発した回廊が金堂前面の庭部を取り囲み、南面して門が開く興福寺の伽藍配置などが登場した。さらに、東大寺においては、金堂及び回廊・門から成る中心伽藍の外側に東西両塔が別の回廊に囲まれて独立する伽藍配置が生まれた。

このような伽藍配置の変遷は、伽藍内における塔と金堂の位置付けの変化及び回廊により囲まれた空間の性質・機能の変化などに伴って進んだものと考えられている。

11世紀後半に白河天皇(1053-1129)が造営した法勝寺では、興福寺や東大寺の伽藍配置から南門とその両脇の南面回廊を取り払い、金堂前面の庭部が広大な園池に臨む伽藍配置が成立した。この伽藍配置の形式が平泉へももたらされ、薬師如来を本尊とする仏国土(浄土)を表現した毛越寺の伽藍配置へと継承された。

1 飛鳥寺・四天王寺・法隆寺；飛鳥寺については本尊の釈迦如来座像のみ現存し、伽藍については地下遺構として残存している。四天王寺については1944年に焼失し、現在は同規模・同様式の鉄筋コンクリート造による伽藍が再建されている。また、法隆寺については、聖徳太子の造営によると見られる当初の伽藍が地下遺構として残存し、7世紀後半の再建とされる木造の伽藍建築が完存する。



Legend ■ Main hall ■ Pagoda ■ Corridor ■ Gate ■ Amida hall ■ Jōgyōdō

図 2-45 朝鮮半島から日本にかけての伽藍配置の変遷



このように、平泉の毛越寺の伽藍配置は、6世紀の仏教伝来に伴って朝鮮半島からもたらされた寺院の伽藍配置に関する発展系譜上に位置付けられるものであり、東アジアの造寺に関わる理念の交流の所産であることを示している。

b. 阿弥陀堂の類型とその発展

阿弥陀堂は阿弥陀如来像を安置した仏堂であり、大きく(i) 常行三昧堂を原形として方3間又は方5間の正方形の平面を持つもの、(ii) 9体の仏像を横一列に安置するために長方形の平面を持つもの、(iii) 阿弥陀如来像を安置した中央の仏堂の左右に翼廊を設けるもの、などに大別できる。

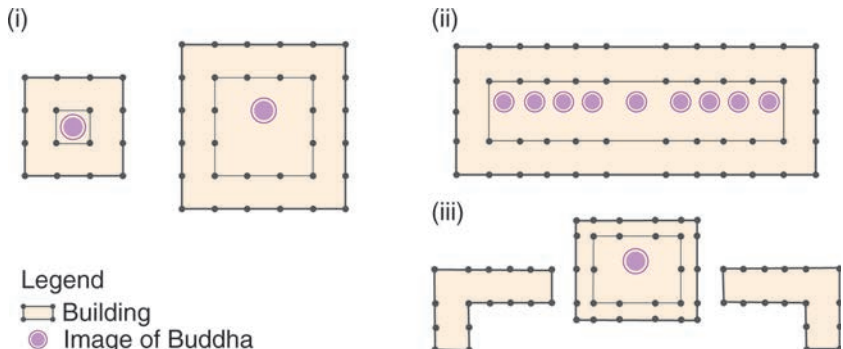


図 2-46 常行堂を含む阿弥陀堂建築の3様式

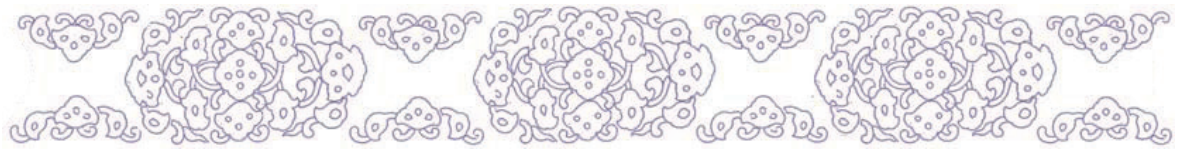
(i)の形式は、中国五台山に学んだ円仁が比叡山延暦寺¹に導入して以来、念仏を唱えながら阿弥陀如来の相好を観想し、安置された阿弥陀如来像の周囲を行道する常行三昧の修法を行うための仏堂として各地に普及し、平泉の毛越寺においても建造された。

中尊寺金色堂は(i)の形式に属するが、阿弥陀如来像を安置する仏堂であるとともに、奥州藤原氏の遺体を納めた霊廟としての性質を持つ独特の仏堂である。

観自在王院跡の大阿弥陀堂跡は一辺14.8mの正方形を成し、(i)の形式に属する阿弥陀堂であるが、小阿弥陀堂跡は東西17m、南北7.3mの長方形を成し、(ii)の九体阿弥陀堂の形式と類似する。

無量光院跡に残された阿弥陀堂の伽藍配置は、明らかに(iii)の形式に属する。しかし、無量光院の阿弥陀堂は平等院阿弥陀堂に倣って建造されたものではあるが、居館(柳之御所遺跡)、彼我を区分する沼沢地(猫間ヶ淵)、西方極楽浄土を建築空間として表現した仏堂、西方極楽浄土の「宝池」を象徴的に表現した浄土庭園、西方極楽浄土の方位を象

1 延暦寺；最澄が785年に開いた天台宗総本山。1994年に「古都京都の文化財」の構成資産のひとつとして世界遺産一覧表に記載された。



徴的に表す背後の独立丘・山域(金鶏山)などの諸要素が東西に並び、平等院以上に現世と極楽浄土との位置関係を意識した伽藍配置及び空間構造が見られる。

このように、平泉の阿弥陀堂は、(i)～(iii)の形式及びその類似例を含むなど多様であり、特に仏堂・浄土庭園などの主要伽藍域のみならず、居館や背後の山なども含め、多様な要素に基づき西方極楽浄土を空間的に表現した無量光院の事例を含む点で特質がある。

ウ. 仏国土(浄土)を表現した芸術作品としての顕著な庭園の形式

a. 自然崇拜思想に基づく祭儀場の意匠・技術と大陸伝来の造園思想との混淆

古来、日本人は、峻巖なる山や切り立った岩塊、円錐形状のなだらかな小独立丘、生命力溢れる巨木、流れ落ちる瀑布、湧き上がる泉などに神(精霊)が降臨すると考え、それらに臨んで神々への祭祀の場を創造してきた。これまでの考古学的調査の成果によると、湧水や流れなどの水辺に臨む祭祀の場には、小さな石を敷き、立石を施して聖域を成す結界が表示されるなど、仏教が伝来する以前に後代の日本庭園に見られる意匠・技術が既に存在したことが明らかとなっている。

7世紀の飛鳥地方の宮殿遺跡の儀式の場や宮殿外の禁苑の遺跡などにおいて発見された複数の庭園遺構は、直線又は曲線の石積みの護岸を伴う様々な形態の園池を人工的に創造する思想が、6世紀に仏教とともに中国・朝鮮半島から伝播したことを示唆している。

それらの起源となった事例として、遠くは釈迦の生誕地として有名なルンビニー(ネパール)の方形の沐浴池の事例や莫高窟(中国)の壁画に描く極楽浄土の「宝池」(矩形の基壇により区画された方形池)の図像があるほか、近くは朝鮮慶州の雁鴨池及び時代はやや下るが仏国寺の九品蓮池(韓国)等に見る曲線状の石積み護岸から成る園池の事例がある。

[本推薦書 167-168 ページを参照]



写真 2-113 (上段左)
春日大社における一の鳥居と御蓋山(世界遺産「古都奈良の文化財」の構成資産のひとつ、日本 奈良県)
photo by Tatehiko Yano

写真 2-114 (上段右)
那智大滝(世界遺産「紀伊山地の参詣道と霊場」の構成資産のひとつ、日本 和歌山県)
© 和歌山県教育委員会



写真 2-115 (右)
城之越遺跡の水辺祭祀遺構(日本 三重県)
© 伊賀市教育委員会

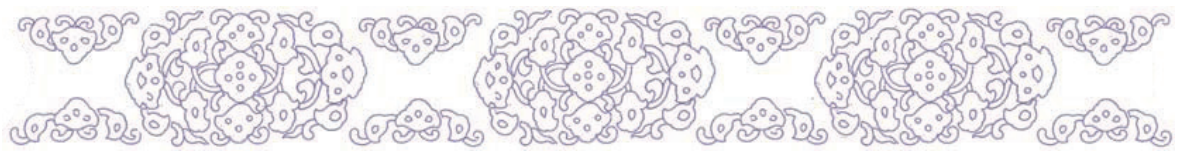
そのような中国・朝鮮半島からの外来の造園の理念、意匠・技術は、仏教が日本古来の自然崇拜思想等と融合する過程で、古来の神々に対する祭儀場に用いられた水辺の意匠・技術とも融合し、8～10世紀にかけて日本に独特の作庭の理念、意匠・技術へと発展・完成を遂げた。



写真 2-116
飛鳥石神遺跡の方形池の遺構(日本 奈良県)
© 奈良文化財研究所



写真 2-117
平城宮跡東院庭園(世界遺産「古都奈良の文化財」の構成資産のひとつ、日本 奈良県)
© 岩手県教育委員会



b. 浄土庭園の確立

[本推薦書参考資料2を参照]

11世紀に末法の世が近づくのに伴って、平安京近郊の宇治・鳥羽・白河に造営された多くの寺院では、死後に極楽浄土への往生を願うとともに、現世においても仏国土(浄土)の表現を目指し、御所(居館)に付属する仏堂・庭園から成る新たな伽藍造営の理念・様式が確立した。そのような伽藍において、仏堂と一体となって造営された庭園を特に浄土庭園という。

浄土庭園は、阿弥陀如来の西方極楽浄土をはじめ、八方と天・地を含む十方世界において仏道に励む諸仏の仏国土(浄土)を、現世における理想世界(楽土)として寺院境内に空間的に表現した芸術作品である。

それは、極楽浄土の方位を象徴する背後の小独立丘、彼岸と此岸との結界を象徴する前面の河川・池沼など、周囲の自然環境とも緊密な関係を保ちつつ、本尊が安置された仏堂と一体となって、本尊の仏国土(浄土)を荘厳するために仏堂の前面に設けられた池を中心とする庭園である。

そのような浄土庭園の様式は、以下に述べるような過程を経て、11世紀～12世紀に平安京近郊に有力貴族が造営した別荘及び皇室が造営した政治・行政上の拠点などにおいて飛躍的に発展した。



宇治

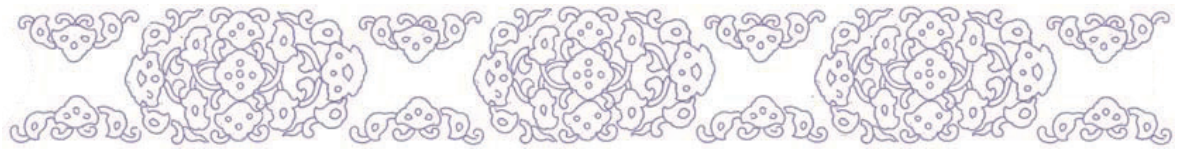
まず、平安京の東南郊に当たる宇治においては、宇治川沿岸とその三方を山に囲まれた良好な風致を活かして、天皇との外戚関係を持つ最高権力者であった藤原頼通が自らの別荘として「宇治殿」を造営した。彼は、末法の世の初年とされた1052年から、翌年の1053年にかけて、「宇治殿」を「平等院」という名の寺院に改め、東方を正面として左右に翼廊を伴う阿弥陀堂と、その前面に園池が展開する浄土庭園を造営した。平等院の阿弥陀堂は現存する同種の建築として最古の事例であり、1,000年にわたる古都京都の歴史を示す一群の建造物の一つとして顕著な普遍的価値が認められ、1994年に世界遺産一覧表に記載された。しかし、平等院は別荘としての良好な環境に立地してはいたが、西方極楽浄土を表現する阿弥陀堂の背後に、その方位を象徴する小独立丘など仏国土(浄土)の表現に必要な独特の地形を備えてはいなかった。



写真 2-118
平等院航空写真(世界遺産「古都京都の文化財」の構成資産のひとつ、日本 京都府)
© 宇治市



図 2-47
宇治市平等院の地形図



白河

白河は、鴨川を挟んで平安京の東に隣接する山麓の地域に当たり、11世紀後半から12世紀にかけて、白河上皇(1053－1129)及び鳥羽天皇(1103－1156)が造営した複数の寺院及び御所から成る区域である。各寺院は、国家鎮護をはじめ、天皇・上皇自らの極楽浄土への往生、現世における仏国土(浄土)の表現を目的として造営され、それらに付属して御所(居館)が設けられた。その中でも特に1077年に金堂が完成した法勝寺は、記録によると、8世紀の平城京内に藤原氏が造営した興福寺の伽藍配置を基本の骨格としつつ、北に位置する金堂の両側から東西に延びる回廊が途中で南に折れ曲がり、金堂と回廊に囲まれた中庭の南に広大な水面の園池が広がる伽藍配置であったことが知られる。園池には九重塔が建つ中島が浮かび、園池の西岸には九体阿弥陀堂が建っていた。

鳥羽

「鳥羽殿」は、2つの河川(桂川・鴨川)が合流する平安京の遙か南方の水郷地帯に位置し、白河上皇が天皇退位の翌年に当たる1087年に造営を開始した離宮である。御所・仏堂から成る一群の建築と自然の水辺に石組・洲浜を施した庭園が、水郷とも一体の景観を形成していた。「鳥羽殿」において、離宮の周囲の自然環境と一体となった造園の手法が発展し、仏国土(浄土)を象徴する仏堂と庭園の造営理念、意匠・技術はさらに確実なものへと進化した。



図 2-48
白河における御所・寺院の配置模
式図

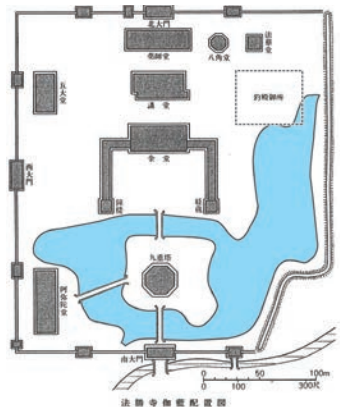


図 2-49
歴史資料から復元した法勝寺の
伽藍配置模式図

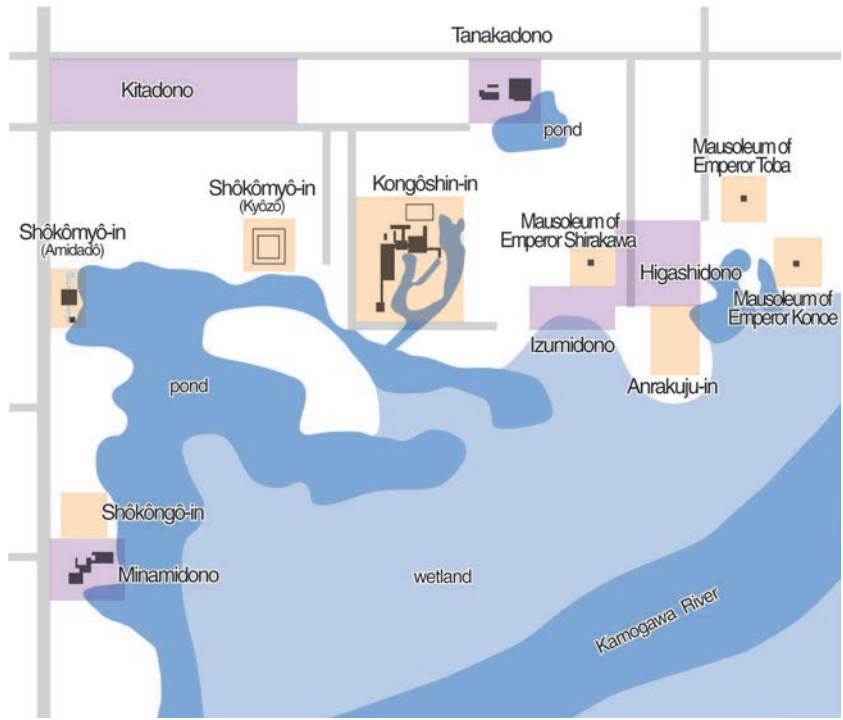
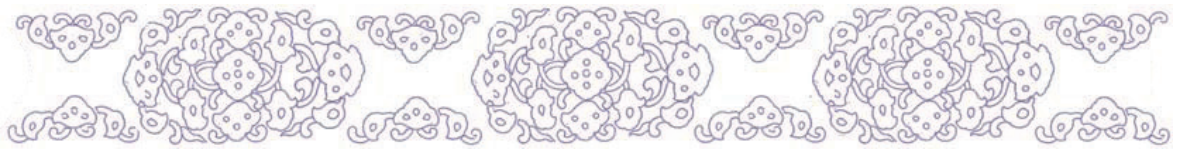


図 2-50
鳥羽における御所・寺院の配置模
式図



c. 平泉における浄土庭園の発展

以上のような日本独特の造園の理念、意匠・技術は、平泉において政治・行政上の拠点を構成する居館・寺院・庭園などの諸施設の造営が進展するのに伴って、さらなる発展を遂げた。

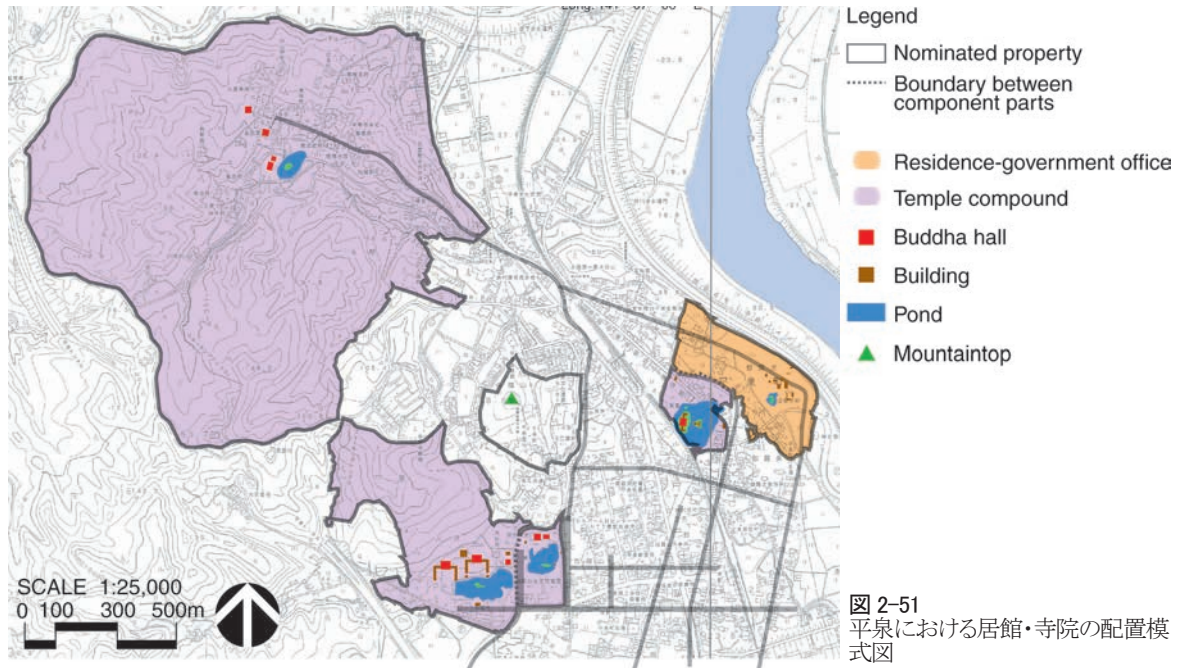


図 2-51
平泉における居館・寺院の配置模式図

大池伽藍跡

中尊寺には、初代藤原清衡が1126年の『中尊寺供養願文』に「鎮護国家大伽藍一区」と記した伽藍主要部分とされ、「大池伽藍跡」と呼ばれている仏堂・園池の遺跡が存在する。この伽藍は、奥州における多くの戦で落命した全ての者の靈魂を敵味方の区別なく浄利(浄土)へと導くとともに、自らの浄土への往生をも祈願し、現世における仏国土(浄土)を表現するために造営されたもので、西に仏堂、東に大池を配置する大規模な浄土庭園の配置形式を持っていたことが判明している。

毛越寺庭園

11世紀後半から12世紀初頭にかけて、白河上皇が国家の安泰と自らの現世利益を求めて建立した平安京東郊の法勝寺において、主要伽藍配置と阿弥陀堂・庭園とが融合する過程で生まれた新たな伽藍配置は、平泉の毛越寺において、背後の塔山をも含め、主として薬師如来の仏国土(浄土)を象徴的に表す仏堂・庭園の伽藍配置へと展開を遂げた。

観自在王院跡

基衡の妻が自らの住居を寺に改めたとされる観自在王院には、素掘り



の遣水及び重量感のある滝石組、大きな水面と簡素な護岸意匠の池などから成る庭園が造営された。それは、寺院伽藍として出発した毛越寺の浄土庭園とは対照的に、住宅に端を発する浄土庭園の類型として貴重である。

無量光院跡

11世紀の宇治の平等院における阿弥陀堂・庭園の伽藍配置は、居館(柳之御所遺跡)から西方極楽浄土の方位を象徴する背後の小独立丘(金鶏山)に至るまで、庭園と仏堂が東西に連続して位置する無量光院跡の究極の伽藍配置へと発展した。このように、無量光院跡の庭園は、浄土庭園の最高に発展した形態を示している。

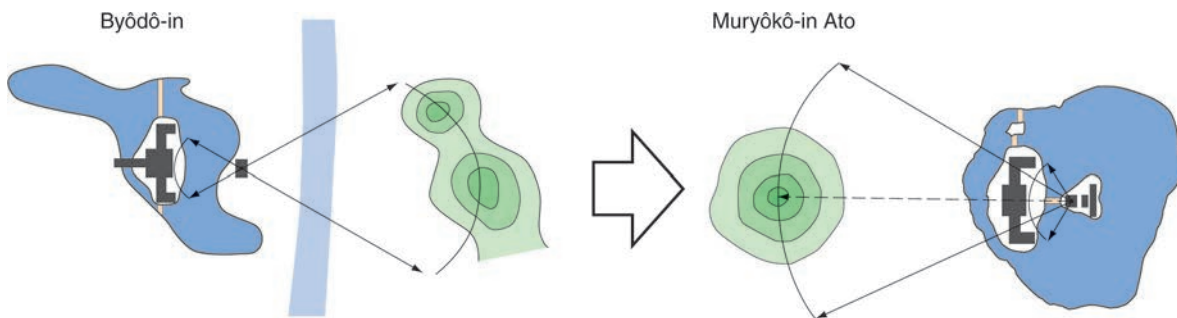


図 2-52
平等院と無量光院跡の伽藍配置比較図

d. 後代における同種の仏堂・庭園に与えた影響

平泉の仏堂・庭園の事例は、鎌倉の永福寺¹(1189～1405年、神奈川県鎌倉市)、白水の願成寺(1160年—現存、福島県いわき市)など、日本の各地に造営された後続の仏堂・庭園の見本として、立地・形態・意匠・技術の各側面に決定的な影響を与えた。

『吾妻鏡』によると、源頼朝は鎌倉の永福寺を造営するに当たり、藤原基衡が建立した毛越寺をはじめとする寺院伽藍の仏堂庭園の理念、意匠・技術を模写したことが知られる。二階堂・阿弥陀堂・薬師堂の3堂が廊によって結ばれ、その東に中央の二階堂と軸線を合わせつつ、橋を介して園池が展開する伽藍の形態・意匠には、基衡が造営した毛越寺のみならず、秀衡が造営した無量光院の仏堂・庭園の理念、意匠・技術の影響を確認することができる。なお、永福寺跡の庭園の考古学的遺跡は史跡に指定され、保護されている。

また、白水の願成寺阿弥陀堂とその庭園は、後世の記録に秀衡の妹

1 永福寺： 1189年に、源頼朝が奥州征討に係る戦死者の冥福を祈願して鎌倉に建立した寺院。



で磐城則道に嫁した徳尼の造営であると伝え、12世紀の方3間宝形造の阿弥陀堂とその南面に中島と橋を擁する園池から成る伽藍配置を持つ。そこには、平泉の観自在王院跡のそれとの共通点が見られ、両者間における影響の関係が見て取れる。なお、願成寺阿弥陀堂は重要文化財に指定されるとともに、その周囲の庭園を含む区域の全域は史跡に指定され、保護されている。

さらに、1267年に北条実時(1224-1276)が鎌倉東郊の六浦金沢に持仏堂として建立した称名寺には、浄土庭園の遺構が残されており、平泉の浄土庭園の類型が上記の永福寺を通じて後代へと確実に伝達されたことを示している。



図 2-55
称名寺及びその周辺地域の模式図

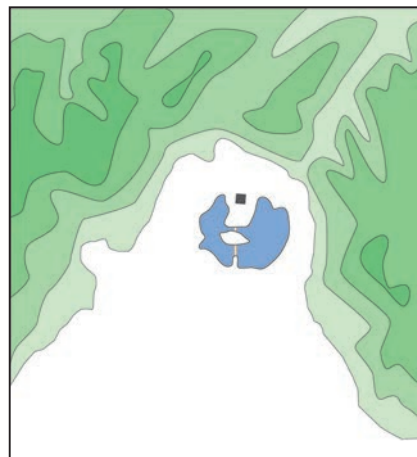


図 2-54
願成寺及びその周辺地域の模式図



図 2-53
永福寺跡及びその周辺地域の模式図

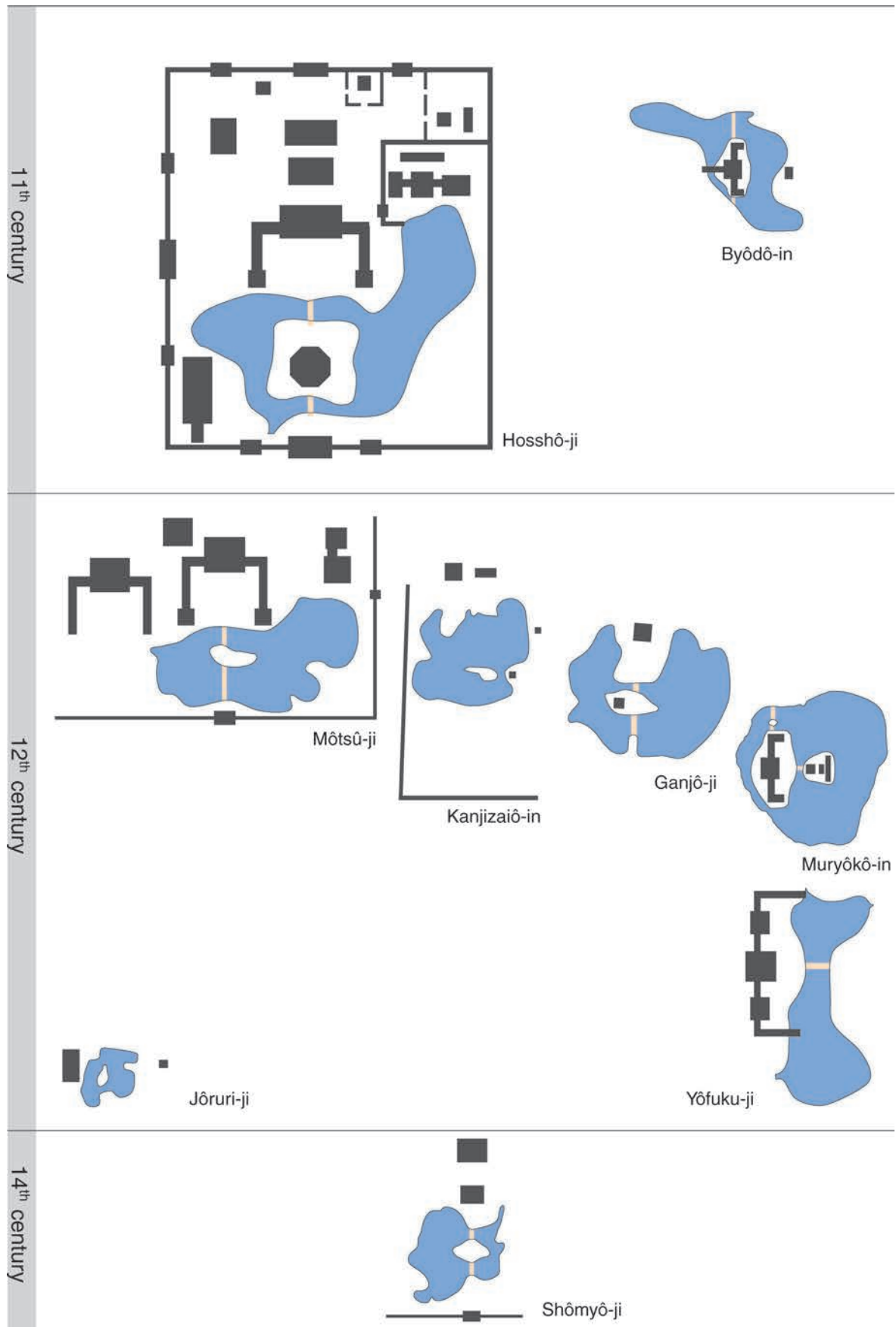
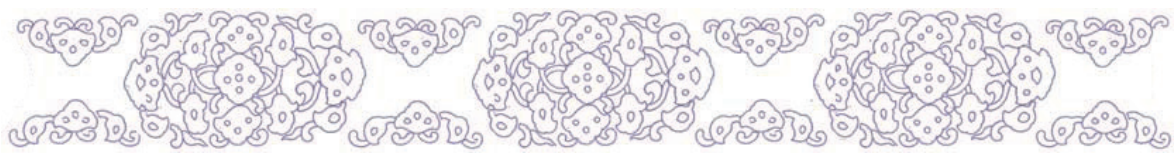


図 2-56 日本における浄土庭園の構造及び編年



e. 『作庭記』に記された作庭の理念、意匠・技術との照合が可能な事例

中国・朝鮮半島から仏教・道教、陰陽五行思想などとともに伝来した庭園の理念、意匠・技術は、日本古来の自然崇拜思想に基づく水辺の祭儀場における湧水や流れの意匠・技術と融合・交流する過程で、9～11世紀の貴族住宅の庭園において発展・進化し、日本庭園の理念、意匠・技術の礎が確立した。それは、世界でも最古の作庭技術書として希少性の高い『作庭記』へと結実し、後代において数々の日本庭園の傑作を生み出す源泉となった。

『作庭記』は、11世紀における特に住宅庭園の理念、意匠・技術を大成した技術書である。その著者は、藤原頼通の子で作庭の分野に造詣が深かった橘俊綱(1028－1094)であるとされている。地形を踏まえて趣向を凝らし、自然の風景を思い浮かべつつ、各地の名所の趣きある部分を取り入れて作庭すべきであると説くのをはじめ、家屋と庭園の位置関係、池・滝・遣水の造り方、石の据え方、樹木の配置の在り方を示すなど、作庭の理念、意匠・技術について詳細かつ多岐にわたり記述している。

このような『作庭記』に見る住宅庭園の理念、意匠・技術は、仏教伽藍において浄土庭園が造営されるに当たっても重要な手本とされ、浄土変相図に描く「宝池」をはじめ、インド及び東南アジア諸国に残された沐浴池、中国及び韓国の仏教伽藍に見られる放生池など、直線及び石積の護岸から成る方形池とは全く異なる固有の浄土庭園の様式を生み出した。毛越寺庭園は、11世紀後半の『作庭記』に記された作庭理念、意匠・技術と完全に照合することが可能な直近の時代の実例として、他に類例のない貴重なものである。

[本推薦書 171-174 ページ参照]

平泉

